

(2012年度山西大学奨学生レポート4月)

## 「窑洞」の村

後藤千恵

4月になり、気温が15度を超えるような日も珍しくはなくなりましたが、突然雪が降るなどまだ春になりきれていない様子です。その中で、私は4月初旬に李家村という山村に行ってきました。今月のレポートでは、李家村についてレポートさせていただきます。

4月はじめ、私は2日間かけて李家山に行ってきました。李家村とは、山西省西部吕梁県の最も西側にあり、陝西省との省境でその省境には黄河が流れています。李家村は黄河とその支流の間にある山村で、李家山の一つの峰の頂上にあります。

李家村は私の住む太原市からは大巴（ダーバー：日本での長距離バスにあたります。）に乗り、4時間程で李家山のふもとの町の磧口（チーコウ：せきこう）に到着し、そこからさらに1時間半ほど徒歩で山を登った所に李家山があります。山と言っても、日本の山のイメージとは違い、「黄土」という山西省付近の地域特有の黄色っぽい土がむき出しになっている山で、なだらかで見通しがよく、山の斜面には所々に棗（なつめ）の木が植えられていました。

李家村ではその家屋のほとんどが「窑洞」（窯洞：ヤオドン）という山西省、陝西省あたり特有の家の造りをしています。簡単に言うと山の斜面を削り、そこに横穴を掘って扉をつけ内装を整えた家屋です。山西省、陝西省の土のほとんどは先にもあげた「黄土」であり、特に山西省は「黄土高原」と呼ばれているほどです。「黄土」は粘性が高く、横穴を掘っても崩れにくいので、「窑洞」を作りやすいことその他、この「窑洞」は夏涼しく冬温かいというメリットがあります。1つの「窑洞」はそれほど広くなく、畳7、8畳の広さで、ほとんどは3つの「窑洞」で1家族が暮らします。「窑洞」の中は寝床、調理場が一つになったような場所が備え付けられており、調理場で使う火と寝床の下で焚く火で冬はとても暖かく、夏はひんやりと涼しいようです。

1家族単位で約3つの「窑洞」が敷地の中にあり、またその家々は山の斜面にあるので、それぞれは階段や坂道でつながっています。下から見た様子は特に壮観で、黄土高原の厳しい環境下で生活してきた人々の様子がありありと見て取れました。

この李家村は現在では主に棗の生産と観光客のための民宿で生計

を立てており、特に村の中の家の多くは民宿を営んでいるか民宿に関わる仕事をしているようです。過疎化と共に高齢化も進んでおり、人の住んでいない「窑洞」も村の中に見られました。この景色は人が住んでいてこそのものだと思うので、過疎化はとても残念なことです。実際住んでいる人にとってはここでの生活は楽なものではないと思いますし、こういった場所はどんどんとなくなっていくと思われます。山西の伝統的な「窑洞」と景色を楽しんだほか、今回は歴史的な建物の保存と価値についても考えさせられる旅行でした。



李家村です。山の斜面にいくつもの「窑洞」が並んでいます。



「窑洞」の中から入口を写した写真です。木の格子には紙が貼られており、障子のように光が入るようになっています。手前はベッドで、4人ほどが横になれる広さです。



「窑洞」の中の様子です。奥行きはあまりありませんが、圧迫感を感じませんでしたし、光が入るので思った以上に明るい室内でした。